

以前、ある歴史学の研究会に出席したときのこと

である。自己紹介で、「思想史を専攻している」と述べた。すると、「頭がいいね」「難解なことをやっているんだ」という讃辞？が返ってきた。(いや、それほどでも……)と、迂闊にも照れ笑いをしたのを覚えている。

かつての思想史研究では、思想家のテキスト分析が主流であり、活字化された著作の解釈が盛んであった。

実証性に基礎を置く歴史学から、思想史とは、頭で考えるもので、歴史学とは違うと見られていたようだ。

「頭がいい」というのは、「足を使わない」、つまり、史料調査をせず、アームチェアー・スカラーのように、書齋での思いつきをもっともらしく語る、ということであろう。讃辞とみえた言葉には、相当な棘が含まれていたことを後で知った。思想史は思想・意識を通じて時代を描くもの

で、歴史学だと考えていただけに憚然としたが、そこには一面の真理が含まれている。

例えば、ある板本が広く分布し、多数現存していても、テキスト解釈に力点を置く場合、それらは所詮、複製物であり、活字化されていればそれで事足りる。わざわざ労力を払って複製物を見に行くのは馬鹿馬鹿しい。そんなヒマがあれば、テキストを睨み、ひとつ新しい解釈を……。

だが、書物研究の登場により、事情は一変した。書物研究では、書物を史料として扱う。ある本がどのよう^にに成立し、普及したのか、その痕跡を探っていく。誰が、いつ、いかに入手したのか。どう読んだのか。

こうした作業を通じ書物を歴史の諸事実の連関のなかに置くのである。

このとき、板本は単なる複製物ではなく、読み手の数だけの個性を示す、どれも貴重な史料となる。史料

を見ずに歴史を叙述することはできない。書物研究の登場とともに、フィールド・ワークする思想史研究者がたくさん現れた。もはや、活字化されたテキストの上に安住することはできないだろう。

中井正一は、「歴史の中に歴史をダブらせる」と述べている。これは、映画のなかの時間に、観客の時間を重ね合わせる意識作用を述べたものである。足を使い、フィールドワークするなかで、書齋や研究室では気づかなかつた、思わぬ発見をすることがしばしばある。このとき、実は、われわれの意識は、日常の時間から抜け出し、時間の裂け目から歴史的時間のなかに踏み込んでいるのではないか、とふつと思ったりする。

本号には、武州く上州と、肥前秋月の二つの史料調査報告を所収した。史料の肉声を感じられるような、そんな気がした。

(小川記)